『「私」とは何か』浜田寿美男　「第一章　ことばの世界と身体」

第一章　身体で生きている時空世界と別に、もう一つの世界を立ち上げる

●身体とことばのかかわりを論じるための出発点として
本書は一種の倒叙法の様式をとって話をすすめる。
発達的には、あらゆる心的現象は身体に根ざすため、身体の働きから話をすすめるのが筋であるようにもみえる。
しかし現実のところ、身体のみを取り出して考えても、そこにことばにつながる糸を見いだすことは難しい。また、ことばについて、もはや一定の見方をとってしまって、それに強く縛られている。
それゆえ、ここではむしろ、いま私たちが囚われている見方を最大限白紙に戻すことが課題となる。

だから

ことばが私たちの世界のなかでどのように働いているのかを見さだめ、ことばの作り出す世界を描いてみる。そのうえで、そのことばの根を身体のなかに求めるという倒叙法が求められる。

一般的な言語論

ことばの初発のイメージ次第で、その後の論の中身がすっかり左右される。
一般的な言語論では、ことばは〈語と文法からなるシステム〉である。
★ことばそのもののもつ第一次的、本質的な対話性に目を向ける視点がない。

対話性→身体とことばを共通の糸でむすぶ。

→ことばが身体性に接続する土俵がまったくみえない。

ことばと身体の両義性

●どのようなことば観のもとに出発すればよいのか
ことばはすべて、どこかで身体の世界に根ざしている。
ところがことばが立ち上げる世界のなかでは、知らないうちに〈ここのいま〉の自分の位置を抜け出し、視点を移動させて、そのことばの世界のなかに身を移してしまっている。
★ことばは身体に根ざし、それでいて身体を超えるという、両義を本性とする。
★ことばの世界と身体の生きる世界の二重化をはっきり見ることができる。
「誕生」や「死」などの、自分のものとしては体験できないものを、観念のうえでこの生身の生のうえに重ねてみる習性をもっている。
※ことばは身体で生きる時空世界を超えて、もう一つの世界を立ち上げる。